様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０００３

研究課題名（和文）アジアにおける内発的地域振興デザインの実態把握とその創造的展開

研究課題名（英文）Understanding and Developing Endogenous Regional Development Design in Asian Countries

研究代表者
宮崎　清（Miyazaki, Kiyoshi）

千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授

研究者番号：９０００９２６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア各地において実践されてきた内発的地域振興の実例を収集し、その諸相と理念を明らかにすることを目的としたものである。実地調査ならびに国際シンポジウムに基づき計273のアジアにおける内発的地域振興の実例を収集した。考察の結果以下が明らかとなった。（１）内発的地域振興はアジア全域において期待され、それに向けた社会的な動きが胎動しつつある。（２）内発的地域振興は、地域社会が有する多様な資源を地域の住民自らが再認識するとともに、その活用を模索する機会を提供するデザイン支援が重要である。（３）上述の体制を目指す過程こそが地域振興のひとつの形態であるとの認識を社会的に高めていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, the authors discuss characteristics “endogenous” regional development design in Asian countries based on field survey and cooperation with researchers and active persons in Asian countries. With regard to the later, the author held two international symposium, 273 examples were gathered. The results of consideration the following assertions can be made: (1) “Endogenous” regional development is pursued in Asian countries, because of environmental problems, decreasing regional identities, and so on, under modernization, urbanization, and globalization. And movements for “Endogenous” regional development have been gradually started. (2) For promotion of “endogenous” regional development, designers and participators should understand that the residents play main roles of regional development activities. (3) We should understand the process of aforementioned situation is one type of regional development design.

研究分野：デザイン学

キーワード：デザイン　地域資源　内発的発展　生活文化　国際研究者交流　アジア　サスティナブル　伝統的工芸

１．研究開始当初の背景

デザインとは、人間の生活を、「あるべき姿」に向けて創造的に改変させる実践的活動である。地域振興デザインにおいては、その「あるべき姿」の形成は、自然・人文・社会などのあらゆる側面において、本来地域が有してきた「顔」とでもいうべき固有の特性を顕在化し活用しなければ実現し得ない。しかしながら、これまでなされてきた多くの「地域開発」においては、しばしば上述の地域特性の十分な精査がなされず、いわば「外」からの論理で実施された場合が少なくない。その弊害は、多くの地域社会において、社会の不均衡やさまざまな環境問題、地域アイデンティティの希薄化などが問題と化していることからも明らかである。

持続可能な社会の構築が切望される今日、地域振興デザインにおいては、これまでの経済効率優先の方法論に代わり、地域特性を活かし、地域の魅力づくりや地域アイデンティティの確立を目指した内発的地域振興への移行が求められている。

ところで、「内発的地域振興」とは、スウェーデンのダグ･ハマーショルド財団が 1975 年の国連経済特別総会の報告書のなかで、「もうひとつの発展 (Another Development)」という新たな発展の概念を提起した際、その属性のひとつとして重要性が初めて指摘された発展概念である。従来の近代化・工業化では果せなかった社会建設を目指し、当該の地域振興にかかわる潜在的資質の内発的活性化を図ることを基盤とすることが謳われた。すなわち、社会連帯の形成と維持機構の確立がその基底に位置づけられ、より健全な社会づくりが目指されたのである。その後、非西欧文化圏である日本をはじめとしたアジア諸国においても、当該の国・地域の歴史・風土に適合しつつ、いわば、固有の内発的地域振興が胎動し展開されてきた。しかしながら、多くの地域振興デザイン計画の事例のなかで主流をなしたとはいい難く、また、それゆえに、これまで、アジア各地で計画・実践されてきた内発的地域振興に関する理念の構築と実践に関する実地調査、ならびに、その実質的展開のための具体的・実践的な研究は十分になされてきたとはいい難い。

今こそ、アジア各地において内発的地域振興の視座からなされてきた地域振興デザイン計画の実態を取り上げ、その理念の構築と実践に関する諸相を、詳細な実地調査を通して明確化し、その知見を生かしたこれからの地域振興デザインのあり方を考究・提示していくことが求められている。

２．研究の目的

本研究は、これまでアジア各地において実践されてきたさまざまな地域振興に関するデザインのなかでも、特に内発的地域振興の視座からなされてきた実例を収集し、その理念の構築と実践に関する諸相を明らかにすることを目的としたものである。主に実地調査ならびに民官学さまざまな立場で携わる研究者・実践者らとの協議に基づき、さらなる生活文化の育成に向けた地域振興デザインのあり方を考究・提示した。

３．研究の方法

本研究では、研究代表者らとすでに密接な協力関係が築かれている日本ならびにアジアの各国・各地域を対象として、各国・各地域の公的機関･民間団体･生活者、ならびに、内発的地域振興の研究者・実践者らとの協働に基づき内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積を図った。

本研究期間中、各国・各地域における実地調査を敢行するとともに、それらの成果を、２巻の論文集にまとめそれを刊行し、かつ、２回にわたる国際シンポジウムを開催し、情報の共有化を図るとともに、内発的地域振興デザインの今後の方策についての検討を行った。

４．研究成果

本研究において把握した内発的地域振興に関する事例研究の成果の一部と内発的地域振興デザインの特質を記載する。

(1) 日本における実地調査に基づく内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積

日本における内発的地域振興の先進的事例を取り上げ、実地参与観察に基づき、内発的地域振興デザインの実践に関する諸要素を抽出した。

本報告においては、福島県三島町において実施した実地調査の結果について述べる。

福島県三島町は、福島県の西部に位置する山村である。過疎・高齢化という社会問題を抱え、今日の日本における典型的な山村のひとつであるといえる。また、冬には２メートル以上もの雪が降り積もる豪雪地帯でもあり、古くから、各家々で冬の農閑期の家内作業として、天然素材を活用したさまざまな生活用具づくりが行われてきた。このような生活者自らの手による生活用具づくりの文化が、当該地域のアイデンティティの礎であるとの認識が町民の間に共有され、町をあげて「生活工芸運動」が始められたのが 1983(昭和 58)年のことである。以来、この運動が、三島町における地域づくり活動の中核に位置づけられ、今日まで確実に継承され発展してきた。「生活工芸運動」は、地域に産する天然資源を活用し、当該地域の生活者らが主人公となって行われてきたことから、まさに内発的地域振興の代表的な事例のひとつであるといえよう。近年では、「生活工芸運動」の基底にある自然との共生生活の理念が隣接する奥会津地域の町村にまで波及し、それらの地域においても生活工芸の価値が見直されつつある。また、都市地域に居住する人びとが三島町における生活工芸運動の価値

を見直し、その成果品が都市居住者のなかでも広く使われるようにもなっている。とりわけ高齢男女によって担われている生活工芸運動が人びとの間で生き甲斐にまで成長していることは、今後の内発的地域振興デザインの指針導出に当たって示唆する点が多い。

なお、当該地域の生活用具づくりは、2003(平成 15)年に、経済産業省指定の伝統的工芸品に「奥会津編み組細工」として指定され、国からの支援が得られる状況に至っており、今後の展開が期待されている。

このように、歴史的・伝統的な社会体制のなかには内発的地域振興に寄与する資源が今日多様に潜在している可能性があり、今後にあっては、それらの再認識・再確認ならびに活用を図ることが求められる。

(2) アジア各国における実地調査に基づく内発的地域振興デザインの実相に関するデータの集積

本研究の研究代表者は、ADCS (Asia Design Culture Society)を主宰し、当該研究テーマである内発的振興デザインに関する情報共有ならびに今後の展開に関する検討会の開催に基づき、そのデータを蓄積するとともにその共有化を、各界の研究者・実践者らに呼びかけた。

本研究期間中に出版した論文集は２巻であった。2015(平成 27)年度にあっては 145 件、2016(平成 28)年度にあっては 128 件の実践報告として、Bulletin of Asian Design Culture Society No.9～10 に収集されている。

また、併せて、それらを共有するとともに、今後の創造的展開のあり方を議論する国際シンポジウムを、上述の論文集の刊行に併せて開催した。それぞれ、台湾台北市に位置する銘傳大学、中国南京市に位置する南京林業大学において開催したものであり、日本ならびにアジア各国・各地域からのべおよそ 300 名が参加した。

(3) 内発的地域振興デザインの創造的展開

先述したように、「内発的発展」は、元来、1975 年の国連経済特別総会の報告書において示された「もうひとつの発展(Another Development)」という概念の属性のひとつとして提起された発展概念であった。その後、特に、日本において多様な議論がなされ、内発的発展と「もうひとつの発展」はほぼ同義とみなして良い。

今日、アジアの各国・各地域においては、急速に展開する近代化のなかでさまざまな社会問題が生起しており、そうした意味においては、改めて今日の状況に鑑みつつ、内発的地域振興の導入を図る必要がある。

(a) 当該地域の生活者らの必要に基づくこと。
(b) 当該地域の歴史を踏まえ、物質的・非物質的側面において地域資源の再発見・再認識に基づくこと。
(c) 自律的・自立的であること。
(d) エコロジー的に健全であること。
(e) 経済社会構造の変化に基づくこと。

世界的にこれまでの経済発展の限界が叫ばれるなか、デザイナーは、今日、改めて「もうひとつの発展 (Another Development)」としての「内発的発展 (Endogenous Development)」の意味とあり方を問い直し、これからの生活創造の支援をなすべきであろう。

本研究を通して明らかとしたのは、以下の各点である。

(1) 内発的地域振興はアジア全域において期待されており、かつ、それに向けた社会的な動きが徐々にではあるが胎動しつつある。
(2) 内発的地域振興は、いずれの地域にあっても、地域社会が有する多様な資源を地域の住民自らが再発見・再認識するとともに、その活用を模索する機会を提供するデザイン支援を行うことが重要である。
(3) 上述の体制を目指す過程こそが地域振興のひとつの形態であり、その認識を社会的にも高めていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 22 件）

(1) Shyh-Huei HWANG, I-Chia TSAI, Toshio MITSUHASHI, Kiyoshi MIYAZAKI, THE APPLICATION OF KANO MODEL ON EXPLORING THE ATTRACTIVE ATTRIBUTES OF COMMUNITY CULTURE PRODUCTS, THE SCIENCE OF DESIGN, 査読有, Vol.61, No.1, pp.27-36 (2014) https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssdj/61/1/61_1_27/_pdf

(2) 戴薪辰、植田憲、中国上海市崇明島における伝統的住居の住まい方 —空間演出の再発見に基づいて—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No.９(JT006)、pp.849-860（2015）

(3) 宮崎清、わら(藁)からのメッセージ ―米づくり、土づくり、生活づくりの礎：真壁仁史と―、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No.９、pp.883-892 (2015)

(4) 青木宏展、植田憲、ハンディスキャナを利用した仏像のテクスチャデータの取得と利用 ―ターゲットマーカーを使用した造形の表面を損なわないスキャン法、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No.９（JT014)、pp.935-944 (2015)

(5) 郭暁蘇、植田憲、中国・吉林省査干湖周辺地域における魚食文化 —西山外村における現地調査を通して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No.９(JT015)、pp.945-954 (2015)

(6) 吉日木図、植田憲、モンゴルにおける遊牧生活にみられる伝統的な時間・空間概念 —内モンゴル・シリンゴル盟チャハル地区における正月行事を事例として—、Bulletin of Asia Design Culture Society、

査読有、No. 9 (JT016)、pp.955-964 (2015)
(7) 黄曼寧、植田憲、視覚化に基づく地域資源の抽出・共有手法 —台湾高雄市橋頭老街の生活文化の再認識—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No. 9 (JT017)、pp.965-972 (2015)
(8) 趙理、植田憲、地域づくりプロジェクトの「グッド」のあり方 —グッドデザイン賞の受賞プロジェクトの類型化を通して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No. 9 (JT018)、pp.973-980 (2015)
(9) 孟晗、植田憲、日本における地域通貨の類型化とその特質 —日本の風土に適した地域通貨の導出を目指して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No. 9 (JT022)、pp.1007-1014 (2015)
(10) 王淑宜、植田憲、台湾・三峡地域「民権老街」における街路空間の文化的特質 —建築物の意匠の社会的・文化的意味の理解を中心に—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No. 9 (JT023)、pp.1015-1024 (2015)
(11) Weichen CHANG, Shyh-Huei HWANG, Akira UEDA, Kiyoshi MIYAZAKI, POST-TEST STUDY ON CULTURAL PRODUCT DERIVED FROM ABORIGINAL STORY MAPPING —Preliminary Investigation Into Design Anthropology (II)—, THE SCIENCE OF DESIGN, 査読有, Vol.63, No.1, pp. 21-30 (2016)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssdj/63/1/63_1_21/_pdf
(12) 鋤田光彦、植田憲、ＪＲ成東駅北側休耕地の利活用の実践と展望 —内発的地域活性化に向けた潜在的地域資源の活用支援—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT008)、pp.963-970 (2016)
(13) 孟晗、植田憲、地域資源の循環ツールとしての地域通貨 —2005～2015 年に「朝日新聞」に記載された地域通貨の運営主体へのアンケート調査を通して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT009)、pp.971-980 (2016)
(14) 植田憲、松崎さおり、青木宏展、歴史的造形資源の保存・共有・活用におけるデジタル造形技術の可能性 —南房総地域における内発的発展の支援へ向けた取り組み—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT010)、pp.981-990 (2016)
(15) 金主榮、植田憲、日本に来訪する外国人の観光嗜好の把握と内発的観光の展開 —韓国人旅行者が記したブログを手がかりとして—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT011)、pp.991-996 (2016)
(16) PANDU PURWANDARU, DUDY WIYANCOKO, AKIRA UEDA, The Production Process of Postharvest Rice Plant Artefacts in a Javanese Community —Production Methods of Postharvest Rice Plant Artefacts in Indonesia—, Bulletin of ADCS (Asia Design Culture Society), 査読有, Vol.10 (JT012), pp.997-1006 (2016)
(17) 張夏、植田憲、中国四川省における羌族の服飾文化の変容 —服飾に見る地域固有のデザイン文化—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT013)、pp.1007-1014 (2016)
(18) 夏彬、植田憲、中国江南地域における伝統的生活工芸品「梳篦」の役割 —ハレとケにおける使用様態の調査に基づいて—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT014)、pp.1015-1026 (2016)
(19) 青木宏展、植田憲、地域活性化における寺院の役割の再確認・再認識 —「千葉大×小松寺プロジェクト」における寺院の顕在化を通して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT015)、pp.1027-1036 (2016)
(20) LIRA ANINDITA UTAMI, DUDY WIYANCOKO, AKIRA UEDA, Production Process of Geringsing Textile —Based on Field Survey Conducted in Tenganan Pageringsingan Village, Bali Indonesia—, Bulletin of Asia Design Culture Society, 査読有, Vol.10 (JT016)、pp.1037-1048 (2016)
(21) 阮将軍、植田憲、花瑶族の年中行事にみられる挑花服飾 —中国湖南省隆回県における花瑶族の内発的地域振興に関する調査・研究—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、Vol.10 (JT017)、pp.1049-1060 (2016)
(22) 宮崎清、「ものづくり」を通した高齢者の生き甲斐づくり —福島県三島町における生活工芸運動の分析を通して—、Bulletin of Asia Design Culture Society、査読有、No.10、pp.1165-1176 (2016)

〔図書〕（計３件）

(1) 宮崎清、Bulletin of Asia Design Culture Society、No. 9、総ページ数 1044、2015
(2) 宮崎清、地域素材活用 生活工芸大百科、一般社団法人 農山漁村文化協会、pp.98-133（総ページ数 595）、2016
(3) 宮崎清、Bulletin of Asia Design Culture Society、No.10、総ページ数 1204、2016

６．研究組織

(1) 研究代表者
宮崎 清（MIYAZAKI, Kiyoshi）
千葉大学・大学院工学研究科・名誉教授
研究者番号：９０００９２６７

(2) 連携研究者
植田 憲（UEDA, Akira）
千葉大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：４０３４４９６５